公益財団法人
浦上食品・食文化振興財団
URAKAMI FOUNDATION

NEWS December 2012

CONTENTS

- 理事長挨拶
- 学術研究助成事業
- 近年助成した研究からご紹介

- 食文化の振興・啓発および協賛活動
  - ラオスで浦上ランチプロジェクト開始
  - H24 年度東日本大震災事業が決定
  - 第 11 回カレー再発見フォーラムに協力
  - カレーアクション事業を後援
  - フードビア金沢を支援
  - 読売写真ニュースを学校に寄贈

- 広報活動
- 事務局より
  - 福田先生のお話
  - お知らせ
  - 編集後記

理事長挨拶

2012年も残り少なくなってきました。昨年に引き続き今年も世界規模の異常気象が人々の生活を脅かしました。自然だけでなく政治指導者もアメリカではオバマ大統領がロムニー氏を破り二期目に入り、中国も胡錦濤国家主席から習近平体制になり世界の注目を集めています。一方日本でも野田総理が衆院解散を決定し 12月16日総選挙を発表しました。激動の時代になりました。円高で景気も低迷し、すっかり自信を失っている日本を活気あふれる明るい日本に導いてくれる政党・指導者を国民はもう一度じっくり検討する時になりました。

私共浦上財団も今年は二つの新しい事業を始めました。昨年より準備しておりましたラオス学校給食支援活動を浦上ランチプロジェクトとして本年9月より三つの学校で開始しました。好評メニューは玉子と豚肉の煮物だそうです。三つの学校がモデル校になりラオス全土に学校給食が実施されるのを夢見ています。

もう一つの新しい事業は東日本大震災支援事業です。昨年震災直後は公益法人協会、WFP（国連世界食糧計画）を通して支援させていただきました。本年度は浦上財団が直接支援活動に携わっていこうと新しく選考委員会を設置して募集し、第一回目として三つの団体の活動に支援することを決定し11月13日仙台において贈呈式を行いました。それぞれの皆さまの活動のご紹介を受け本当に感動しました。特に酪農業を営んでおられた半杭氏からは昨年3月12日の原発事故による避難指示では1週間くらいで戻れると思ったが 6月まで一時帰宅もできなかったこと、乳牛は餌を食べると乳房がはり搾乳できない状況下ではかえって苦しめるため大量の餌を置いて出られなかったこと、家族同然の牛たちに餓死を待つだけの状態にすることは避けたいと国の殺処分に同意したという涙声の発表には私共も目頭が熱くなりました。今回の支援が少しでもお役に立てばと思いました。

こうした支援活動は継続こそ力なりと心に銘じています。贈呈式翌日は支援する団体の1つsweet treat 311の方の案内で訪れた全校生徒の7割が亡くなられた大川小学校や三階建ての建物の屋上に避難してもなお20メートルの津波に患者さんや医療従事者の方が飲み込まれた雄勝病院等々まだまだがれきの山の整理に追われていらっしゃる現地での様子に私共にできることは何かと改めて考えさせられました。

日頃から当財団にご支援いただいている皆様に心よりお礼申し上げますとともに今後ともよろしくお願い申し上げます。

理事長（右）；
東日本大震災支援事業贈呈式で

主な活動紹介

学術研究助成事業

当財団は設立以来、食品と健康、食品の安全性、香辛料食品等に関する５つの分野を掲げ、国公私立の大学・研究所等に対して研究助成事業を行っております。研究テーマ１件当たり３百万円を限度とする助成額は研究者にとってはまとまった研究ができる魅力ある額のようです。

ホームページや研究機関へのはがき等で広く応募者を募り、今年度は６月１日から７月10日の申請期間に207件の応募を受付けました。９月初旬、学識経験者で構成される選考委員会で厳正な審査を経て18名の研究者への助成を決定しました。

贈呈式は10月２日にホテルニューオータニにて行われ、研究代表者の方々、当財団役員、選考委員等出席しました。９月30日から10月１日にかけて台風17号が日本を縦断し当日の交通機関の乱れが心配されましたが、皆さま無事出席できました。浦上理事長挨拶に続いて伏木選考委員長から食品の発展やご自身の研究への意気込みや気迫が伝わる方を選考したとの経緯を報告するとともに出席された17名の研究者の皆さんの研究を応援・鼓舞する話がありました。厳粛な贈呈目録授与式と和やかな雰囲気の懇親会を通じて参加者同士の研究内容の紹介や活発な意見交換が行われ、有意義なひと時となりました。

おかげさまで当財団設立から第27回までの助成件数は291件、助成金総額は７億６千７百万円弱となりました。

助成した研究の成果は、浦上財団研究報告書としてまとめられ、これまで19号まで発刊されています。今年度も20号を発行いたします。今までの研究の一例を後ページに掲げました。ご一読ください。

選考結果を述べる伏木選考委員長（右）と理事長（左）

研究内容を簡潔に発表する研究者

懇親会にて

～近年助成した研究からご紹介～

当財団が助成している研究の多くは一般市民には専門的で難しく、無関係のもののように感じられがちですが、健康や食の安全など私たちにもかかわってくるものも多くあります。そこで平成22年度研究助成を受けられた高橋先生に研究の成果を解りやすく書き下ろしていただきました。

テレビを見るとお昼の時間帯でも深夜の時間帯でも何かしらのサプリメントなど機能性食品のＣＭを１日に１度ならず目にします。そして実際に多くの方が健康・生活習慣病予防・美容のためとそれぞれの目的にあわせ摂取しています。

がんは日本人の２人に１人は生涯で一度は罹るといわれると同時に日本人の死因で最も多い病気です。また、抗がん剤の副作用の緩和や手術後の回復を助けるためにがん患者さんの中にはサプリメントを併用する方もいらっしゃいます。サプリメントの研究は数多くあるなか、高橋先生はがん治療薬とサプリメントの併用に関する安全性について研究なさいました。

平成 22（2010）年度研究助成

「自然免疫関連ペプチドを指標とした食品成分の安全性評価法の構築」

北海道薬科大学薬学部講師　高 橋　夏 子
（助成時は北海道大学医学研究科博士研究員）

がんは日本の死亡原因の第一位を占め、分子標的薬を中心としたがん治療法が急速に発展している現在においても完治は難しいとされていますが、このがん治療の効果向上や副作用の軽減には“免疫力”が大きな鍵となると言われています。

実際、がん患者さんの多くに、手術および抗がん薬の副作用による侵襲から腸粘膜が萎縮し、腸管免疫の機能低下が起こることが指摘されています。このような問題を背景に、がん患者さんの免疫賦活を目的とした機能性食品の市場が拡大していますが、機能性食品の使用は恩恵ばかりではなく、それ自体もしくは薬剤との併用による健康被害をもたらす可能性があり、使用には注意が必要とされます。がん患者さんの安全性の確保を考える上で、共に口から入る機能性食品や薬物が最初に接触する腸管での食－薬間相互作用の科学的検証が極めて重要となりますが、現在の研究は小腸での吸収に焦点を当てたものがほとんどです。そこで、我々はがん患者のほとんどが直面する腸管免疫低下に着目し、がん患者に汎用される機能性食品成分について腸管免疫への影響から食－薬間相互の安全性評価をすることを発案しました。この免疫を評価する物質として、近年、腸管免疫の分野で脚光を浴びている小腸パネート細胞から分泌される α-defensin という抗菌活性を持つペプチドに注目しました。このペプチドは、クローン病のような腸管疾患との関連や腸管免疫との関連等、生体にとって重要な機能があることが報告されています 。

まず最初の検討として、抗がん薬によって引き起こされる α-defensin 低下に対する茶ポリフェノールの効果を検討しました。この実験によって、茶ポリフェノールが低下した α-defensin を回復したことから、免疫低下を軽減する食品素材となりうる可能性を見出しています。

この研究はまだ始まったばかりですが、今後さらに重要となってくる機能性食品の安全性評価において新たな基準となり、がん患者さんだけではなく、生活習慣病を予防する食品の探索等、多くの人の健康維持・増進にも役立つことを大いに期待しています。

（この研究は研究報告書 Vol.19 に掲載されています。また当財団 HP にても閲覧できます。）

食文化の振興・啓発および協賛活動

■ ラオスで浦上財団ランチプロジェクトを始めました

ラオスはLLDC国（後発発展途上国）の一つで農村部はまだまだ貧しい家庭があります。そのような家庭の子供たちは毎日の食事をとることができなかったり、ご飯だけでおかずなしの食事だったりします。また、畑仕事や家事・弟妹の世話など、義務教育である小学校にも通えなかったり、学校に行ってもおなかがすいて授業に集中できないため授業内容についていけなくなってしまったりします。

そこで、浦上財団は学校給食がもたらす様々な効果に期待し、ラオスにおける奨学金事業で既に実績のある一般財団法人 民際センターに委託して学校給食モデル事業を始めました。この事業は地域の役場、学校の先生、お母さん方が一致協力して進め、最終的には自立できる体制づくりを目指しています。

今年９月から小学校２校、中学校１校でランチ（おかず）の提供が始まりました。子供たちはご飯だけ家から持ってきます。それも用意できない子供には周囲の子供たちが持参したご飯をシェアするようです。

初年度である今年は給食設備や食器を整え週１回の提供からスタートしますが、２年目は週３回、３年目は週５回に増やしていきます。同時に子供たちのみならずお母さん世代にも栄養バランスや食前の手洗い・食後の歯磨きなどの知識の普及を推進していきます。

提供されたランチを食べる子供たち

■ 平成 24 年度東日本大震災支援事業が決まりました

昨年３月の東日本大震災は東京に住む私たちの記憶に今なお鮮明に残る未曽有の災害です。一年半経ってもまだまだ復興への道のりが遠いなか、震災地域の多様なニーズに応え現場に寄り添った活動を行っている諸団体の存在は被災地の復興の大きな力であると考えます。そこで浦上財団は現地で活動するNPO等を支援することを通じて、ささやかではありますが被災地復興のお役に立ちたいと、東日本大震災支援事業を開始しました。

岩手・宮城・福島の３県で食にかかわる復興活動を行う団体を対象に募集をかけ７件の応募がありました。選考委員会での協議のすえ支援が決まったのは、未来を担う子供たちの逞しく生きる力を育むプログラム、被災した高齢者への地野菜を使った揚げ物でなく煮物中心の低カロリー減塩のお弁当サービス、今年４月に警戒区域解除された南相馬市小高区での土壌検査や飼料試験栽培の３活動です。

11月13日には３団体の代表の方に仙台に集まっていただき、贈呈式が行われました。皆さまそれぞれ震災でそれまでの生活が一変してからのご苦労とそこから一歩ずつでも前進することから始める活動の意義と決意を語られました。これからの復興に必要なものは「生きがい」との現地の声に、浦上財団は雇用創出など「生きがい」につながる活動を支援してまいりたいと思います。

受賞者の皆さまと

支援活動テーマ	支援活動団体	代表者名	活動場所	支援金額
漁業・農業・料理体験プログラム	一般社団法人 sweet treat 311	立花　貴	宮城県石巻市雄勝町	100 万円
おばぁちゃん弁当　配食サービス	オアシス	大泉　功太郎	宮城県岩沼市内	100 万円
原発事故による放射能汚染農地の再生から酪農業の再開を目指す	ＮＰＯ法人 懸の森みどりファーム（認証申請中）	半杭　一成	福島県南相馬市小高区大富地内	100 万円

■ 第11回カレー再発見フォーラムに協力

1999年発足以降、カレーの文化や伝承を科学的な視点で捉え直し、カレーの新たな価値を紹介する「カレー再発見フォーラム」の第11回フォーラムが6月19日にサンケイプラザで行われました。当財団も第1回より協力しております。

今回は前回に引き続き脳科学者の茂木健一郎氏が『意欲維持・ストレス抑制に対するカレーの機能性』～気力・体力アップのためのカレー活用術～というテーマの講演、世代・トレンド評論家の牛窪恵氏との対談でお話を繰り広げてくださいました。

【講演内容】前回第10回では実験の結果カレーを食べた人の脳はIQ換算で「7」上がるくらい活性化することが分かったと報告した。今回の試験では、20～50歳代の男性に煩雑な課題を行ってもらいカレーもしくは比較のためのカレーからスパイスを抜いた煮込み料理（疑似カレー）を食べた時（各10人）の影響について①唾液アミラーゼの活性の度合い（ストレスを感じると活性化する）、課題遂行時の途中でカレーもしくは疑似カレーの香りを嗅いだ時の②回答時間の速さ（モチベーションが高いと最後まで早い）③脳波（疲労度が上がると振幅が小さくなる）の3つを調べた。

結果は疑似カレーを食べた人たち（比較食群）は唾液アミラーゼが活性したのに対しカレーを食べた人たち（カレー群）は活性が抑えられており、カレー群の方がストレスが抑えられていた。香りが影響する回答時間・脳波の両方ともカレー群の方が比較食群より疲労が抑えられモチベーションが維持されることを示した。

対談する茂木氏（右）と牛窪氏（左）

【対談内容】日本では1990年代からストレス社会に入っており、バブル崩壊後に成人期を迎えた団塊ジュニア世代以降はストレスを避ける傾向が強く、結婚しない若者、恋愛しない若者が増えている。反面家族や恋人を大切にする「イエラブ族」（牛窪氏命名）も増えている。イエラブ族の象徴的なシーンとして外食でなく鍋やカレーを一緒に楽しむことがあげられ、「カレーが好きな夫婦は夫婦仲が良い」という調査結果がある。カレーは「同じ釜の飯」「おふくろの味」に当たり、家族の絆の象徴的な存在になっている。今回の実験のモチベーションの維持、どうなるか分からない不安やストレスへの対応は恋愛でも非常に大切なこと。今回発見したカレーの働きが幸せな恋愛にも役立つといい。

■ カレーアクション事業を後援

Curry Action

昨年に引き続き今年も農業王国で地産地消が容易な北海道と九州（5月札幌市、6月福岡市）における「カレーアクション」に後援しました。カレーは1皿あたりカロリーベースで69%と自給率として優等生のメニューであるカレーを通じて自給率向上に貢献しようという活動です。また、カレーは具材を選ばず野菜をたっぷりとれることから北海道では各地域のご当地カレー、九州では各県が名産の野菜を使ったメニューの紹介がありました。

【札幌会場】ご当地カレーの試食

【福岡会場】シニア野菜ソムリエの久保ゆりか氏による野菜セミナー

■ フードピア金沢を支援

独自の食文化がある石川県の冬の日本海の幸・加賀野菜を紹介する食のイベント「フードピア金沢」は毎年2月に金沢市を中心に石川県下で開催され、当財団は第1回（1985年）より支援しています。

一流料亭でお料理と著名人の話を楽しめる「食談」、金澤老舗百年會の経営者のお話を金澤老舗百年會の料理店のお食事で楽しめる「金澤老舗よもやま話」などが開催されました。

金澤老舗よもやま話の会場にて

■ 読売写真ニュースを学校に寄贈

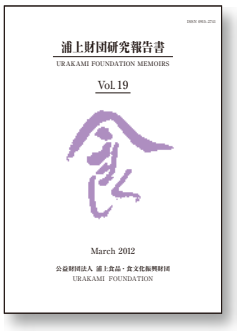
『「食」は「人」に「良」いこと、元気のもと』の標語をパネルに用い、「食育」に熱心に取り組んでいる小学校を軸に中学校、高校、図書館に教材資料として毎週写真ニュースを提供しています。

小学校等に寄贈しているパネルの一例

広報活動

研究報告書の発行

3月に浦上財団研究報告書Vol.19を発行し、全国の研究機関附属図書館や都道府県立図書館にお送りしました。また、昨年秋から今年の秋までに当財団に提出された研究報告を収めた研究報告書 Vol.20を来年3月に発行する予定です。



財団 HP の更新・財団リーフレットの配布、財団ニュースの発行

http://www.urakamizaidan.or.jp のホームページを制作し、財団が行った活動を随時アップしております。このホームページでは、研究助成事業や東日本大震災支援事業の募集要領・申請書のダウンロードや既発刊の浦上財団研究報告書（Vol.14 以降）の閲覧にも供するなど多くの方々が訪問しております。また、より多くの方々に財団の事業活動や、寄付金の募集活動などを知っていただくためリーフレットを作成し、各種イベント会場で配布しております。また、写真を多く使ってその年の活動をまとめた財団ニュースを12月に発行しております。

事務局より

福田先生のお話　**震災支援事業贈呈式の後、昨年のニュースでご寄稿いただいた東北大学大学院農学研究科の福田智一先生の研究室を訪ねる機会がありました。浦上財団の研究助成金で購入なさった機器を拝見した後、先生が研究の傍ら昨年から継続的に取り組んでらっしゃる警戒区域内での活動のお話を伺いました。そのお話が心を打つ内容でしたのでご紹介させていただきたく思います。**

- 20ｋｍの警戒区域内のある畜主さんは避難指示後も週に何度か警戒区域に通い、家畜の餌や水を与えていた。しかしその後に警戒区域に入った何者かによって家畜は解き放たれた。解き放たれた家畜は、水を求めて沼に入った。家畜は水を飲むどころか、沼から出ることが出来ず、溺死する悲劇が生じた。この例のように 20kmの警戒区域の内部では、家畜をめぐる様々な悲劇が生じている。解き放たれた家畜の一部は既に野生化しており、その体内には多くの放射性物質が沈着しているため、農業目的に利用することは既に困難な状況にある。
- 東北大学では農学、歯学、理学、医学など様々な分野出身の研究者から構成される研究チームが発足している。研究チームは許可を取得し、20km の警戒区域内で活動を行っている。畜主さんの同意を得られた場合に限り、福島県の獣医さんが安楽死された離れ牛から、様々な臓器を採取している。研究チームは筋肉を含む様々な臓器における放射性物質の濃度を測定し、今後の畜産業の復興に役立てようと考えている。
- 実験データでは、同じエリアに生息していてもたまに一時帰宅する畜主さんが給餌する管理された餌を食べてかろうじて生きながらえていた牛と野生化して周辺の野草を食べていた牛とでは、体内における放射性物質の汚染の度合いが大きく異なることが分かった。このことは食べさせる餌をしっかり管理すれば安全な畜産物の生産が可能になることを示し、福島の畜産業に復興の希望があることを示唆している。
- 畜主さんの「この子たちの死を無駄にしないためにも、この子たちの死を次世代の家畜に役立ててほしい。」との言葉が胸に響いている。

お知らせ

浦上財団は公益財団法人ですのでご寄付くださった皆様が減税を受けることができます。ご寄付後、当財団からお送りする寄付領収書を添付して所得税の確定申告なさってください。また、当財団は東京都条例により個人都民税の寄附控除が受けられる団体として指定されております。都内にお住まいの方は確定申告時に上記所得税と合わせて住民税欄・都民税の寄付金控除の記載もどうぞお忘れなく (*^-^)b

編集後記

今年は新事業が２つ始まりました。慣れないことも多くてまごついたり要領がつかめなかったりしましたが、多くの方のご協力で何とかスタートさせることができました。震災支援事業は復興までまだ時間がかかると思いますので、継続してお力になれたらと思います。またラオスのランチプロジェクトは国の未来がかかる子供たちの健やかな成長のお手伝いができれば嬉しいです。

新規事業で忙しくしていた分、財団ニュース発行が遅れてしまいました。皆様にご迷惑をおかけし誠に申し訳ございません。これからも事務局として一生懸命やってまいりますのでこれからもご指導、ご支援の程よろしくお願いします。（森川洋典・浦上佳江）

〈お問い合わせは下記まで〉
公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団
〒102-8560　東京都千代田区紀尾井町 6-3　ハウス食品東京本社ビル
電話：050-3532-6365　FAX：03-3264-6188
E-Mail: main@urakamizaidan.or.jp　URL: http://www.urakamizaidan.or.jp